

続ボラッチョ・ボニートのメキシコ便り(No.44)

「学ぶことの苦さ、実りの甘さ」

・・・さあさ、気軽になさってください・・・

ボラッチョ氏は今もってと言おうか、時々と言おうか睡眠中に、2つの顕著な夢を見ることもある。夢と言ってもバラ色の話ではなく、ネガティブな夢である。そのひとつは、学生時代における、期末試験などに失敗した夢である。実際は、記憶をたどる限り、内容はともかくとして、一つも失敗したことはないのだが、依然として試験と言うものは、トラウマとして残るのだろう。

もうひとつは、仲間内と話しているあるいは仕事中に、スペイン語の言葉が出なくて、悪戦苦闘している夢である。これは生々しいし、こちらの方が夢の中に出てくる回数は多い。外国語を話すと言うことは、これも相当心理的負担になっている筈で、それゆえ、常に夢の中に出てくるのだろう。

着任した所の首脳に、一所懸命暗記していた、来国目的などの形どおりの挨拶をした折、「**Está usted en su casa**」(エスタ ウステー エンスウ カサ と発音し、直訳は貴方の家にいる・・・気楽にして下さい)と挨拶をされた。

これが、35年ほど前に始めて海外生活を経験したときの、中南米人と交わすスペイン語の、苦難生活の開幕を告げるファンファーレだった。

「グラシアス、ムイ アマブレ(御親切にありがとうございます)」などと簡潔だが、的確に答えれば、「うん、彼はスペイン語が出来るわい」と思われてひとまず合格点であろう。

しかし、「¿**Está usted en su casa?** (貴方は自分の家にいるのか?)」(スペイン語では疑問文の場合、文頭にも疑問符を逆さにしたものをつける)と言う意味にとって、実際に口から出た言葉は、次のような堂々たる迷回答?をしてしまった。「いいえ、私はホテルから通っています」

もっともこの時は、相手の言ったことに対して、ともかく回答出来たと思っているので、“ホット”安堵の気持の方が強く、ちんぷんかんぷんの返事をしていたとは、少しも思っていなかった。このことは後から振り返ってみて、分かったことなのだが、日本語で言えば、「ようこそ」くらいの軽い気持でお客に挨拶をしたところ、相手側から、自分の感情を無視されたような、とんでも無い返事を返され、目が点になるどころか何点にもなるほど面食らったことと思う。

ボラッチョ氏とて、当分の間そのことが頭に残り、気軽に過ごす気分ではなかった。スペイン語どころか外国語など、まったく縁のない社会生活を送っていたのに、急遽出張命令を受けた際のにわか勉強のツケが、早速露呈したと言える。まさに戦時中突然応召命令を受け、短期養成された学徒出陣の見習士官が、最前線に着任するやいなや、慣れない指揮でたちまち馬脚を表した格好である。

滞在後しばらくして職場の同僚が集まった席での会話で、お決まりの、「スペイン語は上達してきたかね?」と聞かれたので、「**cada día mejor** (カダ デイア メホール、日毎に良くなる)」と答えるべきところを、



初対面の挨拶・・・
某業界の社内報のイラストを借用し、一部加工した

「cada día mujer (カダ デイア ムヘール、毎日女性を)」と、中南米人の喜びそうな答えをしてしまった。高々、2字の違いでも、違いは違いで、意味はもちろん完全に違う。座がどっと涌いた。

本人は正しい答えを真面目に答えたつもりなので、その時は何で受けたのか分からず、ただ単にニヤリと笑ってごまかしていた。しばらくたってから間違いと気がついて、またまた顔の赤らむ思いであった。経験が浅いにしては、ユーモア抜群だとも解釈されたのだと思う。

「外国に住めば、その内に外国語にもすぐ慣れるよ」との、先輩の言葉はあったが、このことは子どものように、純真な心を持った者に対しては言えるだろうが、ある程度年をとりひねてきた成人には通じない。三つ覚え、二つ忘れることの、繰り返しの勉強しかないと悟るのである。まさに、次の諺がふさわしい。

「El aprender es amargura, el fruto es dulzura」(エル アプレンデーラ エス アマルグウラ エル フルート エス ドゥルスーラと発音し、直訳はタイトルそのものである)

最初の海外経験からはほぼ30年ぐらい、殆どスペイン語を喋ることの無かったブランク生活を経て、現在は滞在当初の、「読めず、喋れず、聞こえず」の三重苦からすこしばかり脱出して、工業系大学で自作の教材を使って、既に何回ともなく長時間の講義を行なうなど、スペイン語を日常的に使っているとはいえ、言葉に関しては、今もって苦難の連続と言った方が当たっている。



このような環境の中、所々方々で頼る人もなく一人で仕事をしている私を、助けてくれたり力づけてくれているのは、楽天的で人情味豊かな派遣先の仕事仲間たちである。辞書から直訳した硬い言葉を、別の言い回しで教えてくれたり、技術資料の翻訳を添削してくれたりなどで、このときにはこちらが指導を受けるので、神妙に聞いている。

前述の失敗エピソードも、今は昔の遠い話として、少しずつ語彙が増え喋る楽しみを覚えた今日、スペイン語はこれからも益々付き合っていきたい言葉となっているが、しかし、今参加している、ミッションが終わると、法定老齢年齢に達している、ボラッチョ氏ゆえ、もうスペイン語を自由に使う世界と、完全に別れることになると思うと、若干感傷的気分になる。

「言語」というのは、価値観でもあり、道具でもある。価値観としては、日本人としてのアイデンティティ、つまり日本語を守りたい。だが、道具としてはスペイン語を含めた、外国語を大いに利用せざるを得ない。反面、アイデンティティそのものが、多元化しているのが現実で、母国語を極めるのも難しいが、まして外国語はいわんやおやである。

あの場ではこう言えば良かった、ああ言えば良かったなど、後の祭りだが、頭の中を常に過ぎる。タイトルに記したように、日々苦いばかりでなく、甘さが実感できるときは、永久にこないだろうなどと考えながら、今日もまたテキーラの杯を重ねるのであった。(2010年7月8日)